



発行 真宗大谷派 高山教務所
発行所 出雲路 善公
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
電話 (0577) 32-0776
毎月20日発行 50,000部
三市一郡無料配布
印刷 山都印刷株式会社

念じられ
照らされて

没後三五〇年、
佐奈姫について

三本昌之



〔略歴〕
一九五八年高山市生まれ。蓮徳寺住職。大谷大学真宗総合研究所研究補助員、高山別院同朋センター主事、真宗大谷派教学研究所嘱託研究員を歴任。編著に『飛驒と蓮如上人』『さなひめさま』『飛驒御坊照蓮寺縁起』がある。

今年も、六月二十六日午後、照蓮寺第十五世内室佐奈姫(瑤臺院釈宣純尼)の法要が、松本町の照蓮寺松亭跡の墓所と公民館で営まれる。松本町の人々が草刈などの世話を下さっている。佐奈姫は、一六三三(寛永十)年、東本願寺第十三世宣如上人と成等院の末娘として誕生した。親鸞聖人の門弟嘉念坊善俊以来の飛驒の真宗の根本道場照蓮寺(現高山別院)相続のため、九歳で内室に迎えられた。夫は、三代藩主金森重頼の三男宣心(從純)であった。二男一女をもうけ、一六六七(寛文七)年、京都で還浄した。今年没後三五〇年に当たる。

生前の記録は乏しく、照蓮寺の歴史を記した『岷江記』も、入興直後に舅の宣了との対面を記すだけである。照蓮寺は、佐奈姫没後四十年足らずで東本願寺に献上され、掛け所(別院)となり、度重なる火災で遺品は失せた。わずかに愛用の中啓と鏡台、貝合せが伝えられる。また、父宣如(五通)と兄琢如上人(一通)からの書状、葬儀中陰記録が残る。飛驒の人々は「佐奈姫さま」と呼び習わし「瑤臺院宣純尼」の法名は忘れられている。それは「御門主のお姫さままで、九歳で輿入れし、幼子を残し早世」した生涯から「おいたわしや」という

哀惜と同情で語られてきたからである。言い伝えには、「夫の宣心は、武門の出のため粗暴であった」「幼くて両親と離れた」「僻遠の飛驒へ嫁ぎ、貝合せで遊んでいた」「石臼を挽き、粉を食し質素に暮らしていた」「厳しい飛驒の冬が堪えた」「望郷の念が募り命を縮めた」「死を悲しんだ人々が墓所参道に石臼を敷き詰めた」等がある。墓所参道には三二五個の石臼が並んでいる。しかし、人々は生活の大切な道具である石臼を踏石にすることはない。宣心が、松亭の趣向に置いたのであろう。貝合せは、相手方に最初に渡す婚礼道具の第一

である。夫と婚家に尽くすという妻の貞淑性を象徴する。幼い佐奈姫も封建社会の倫理観の下に置かれていた。佐奈姫の姿は、父と兄の書状の中に窺うことができる。父へ、病氣見舞いに好物で滋養のある山芋を送ったこと、兄が、病氣の佐奈姫に母親が京から医師と薬師を派遣したこと、また母の病氣が本復したこと、上洛を心待ちにしていることを認める。そこには、遠く離れた親と子、兄妹が互の身体を気遣う姿がある。佐奈姫は、慣れない生活のなかで、善俊以来の本願念仏の法灯を相続する照蓮寺坊守の務めを求められたが、次第に体調を崩す。晩年上京し、東本願寺のすぐ前の長福寺屋敷で療養していたが、寛文七年六月二十七日、幼子を残し命終した。兄琢如上人がお剃刀と法名を授け、枕勤めを行った。葬儀は、末寺住職の内室として異例の準本山葬で行われた。母の強い意向であったが、兄も受け入れ「私」として、京・山城の末寺住職に参勤を求めた。御堂衆が読誦し、兄琢如

上人、恩光院(のち第十六世一如上人)など一門や一家、院家、洛中の寺院が参列する盛大な葬儀となった。遺骨は満中陰まで墨衣の寿像とともに長福寺に安置されその後飛驒へ還り、さらに時代下がり、松亭跡に「龍興院釈宣心、瑤泰(臺)院宣純」と刻まれた比翼の墓が建てられた。佐奈姫を慕う坊守が中心となり、法要が行われるようになった。主催は幾たびか変遷し、現在高山別院の行事となっている。現在は、教区の婦人研修会が六月二十五日・二十六日に開催され、終了後に法要にお参りしている。佐奈姫を、悲劇のヒロインに留めず、宗祖親鸞聖人の妻恵信尼のように、本願念仏を相続した坊守、女性念仏者の象徴として崇敬し顕彰するためである。



佐奈姫の墓

佐奈姫忌法要

佐奈姫(1633年~1667年)は、東本願寺第十三代宣如上人の娘で、照蓮寺宣心にわずか9歳で嫁ぎ、35歳の短い生涯を終えました。その墓前で法要を営み、聞法の座をもちます。



日時：6月26日(月)午後1時30分から
会場：佐奈姫墓所・松本公民館(高山市松本町)
法話：出雲路 善公 輪番
※別院から送迎があります。現地には駐車場がありませんので、参拝される方は午後1時まで別院事務所に集合ください。

問 葬式の「御香典」やけい、御霊前「ごきんごころ」って何ですか？
答 お葬式にお出しする「香典」ですが、「仏さまにお香をささげる」という意味があります。今はお金を包んでいますが、昔は実際ににお香を持参していたのです。お香はその香りでもって、お内仏を荘厳・おかざりするものであり、同時に、香りそのものが仏さまの心におかざりするものでもあります。香りが染み付いた人は、その人からも香りがするように、念仏の教えも香りのように染み付くということを親鸞聖人はおっしゃいました。お香は満遍なくいきわ

たります。その満遍なくいきわたる、仏さまの教えを香りであらわしています。また、よくテレビやマナー本などで「御霊前」は各宗派で使われるといわれています。亡き人が「霊」となると、四十九日をかけて成仏するという考えから「霊に供える」という意味合いで「御霊前」というのですが、真宗の教えからするとふさわしくありません。亡き人はすみやかに諸仏となり、阿弥陀仏のいらつしやる極楽浄土へ往生されます。お香は、亡き人の霊に供えるものではなく、仏さまの浄土をおかざりするものというように考えるのがいいでしょう。真宗の仏事は亡くなった方の慰霊・鎮魂のために行うものではないです。亡き人をご縁にして集まった人々とともに、仏縁にあってという大切な場所なのでしよう。

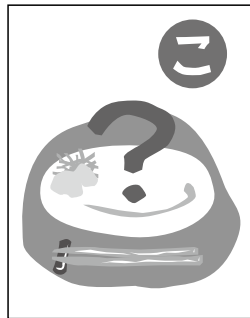


家族を超えて

女と男の

ナムアマミダブツ ⑱

藤場 芳子



誰の好みで決めるの

献立を考える

料理研究家・土井善晴さんの

「汁一菜でよいという提案」という本が話題になっているそうです。私も読んでみたのですが、その理由がちよつとわかった気がしました。単に料理の作り方を書いた本ではなく、毎日の食事を作る人に「無理しないでいいよ。食事は楽しくね」というエールが込められているからです。ある調査によると「料理をするのが負担に感じるのはどんなことですか」という質問に対して、第1位の答えは「毎日のメニューを考えること」だそうです。この本を読んだ子育て中のお母さんが「おかずを何品も作らなくてはと思って苦痛だったけど、ご飯と具だくさんのお味噌汁があれば十分と言われて、ほっとした」と言っていました。

「作る人」は誰?

「ワタシ作る人、ボク食べる人」というCMがテレビから流れたのは

1975年のことでした。「料理を作るのは女性」というのは古い考え方であり固定観念だというクレームが入り、放送が中止になりました。75年と言えば、国連が「国際婦人年」を制定した年でもありません。ということは、まだまだ男女平等が実現されていなかったとも言えるでしょう。若い世代の半数は夫がゴミ出しやお風呂掃除をしているそうですが、食事作りとなると妻が7割とまだまだ高いのが現実です。あなたの家ではどうでしょうか。妻が病気で寝ている時に「僕の食事は心配しないでいいよ、外で食べてくるから」と夫が言ったという笑い話のような会話を聞いたことがあります。あのCMから40年経った今、「作る人」と「食べる人」の関係は変わったのでしょうか。

それぞれの場合

さて、今回の句は「献立は誰の好みで 決めるの」です。絵に描かれているお皿の上にクエスチョンマークがついていますが、この質問に対する答えは家族構成によって違ってきますね。三世同居ならお年寄りのことを考えて煮物や漬物が、食べ盛りの子どもがいる場合はスタミナのつきそうな肉料理になるかもしれません。定年後の夫と二人だけだと、「夫の食事作りのために外出できない」とか「食事を作ってきたから、今日は思い切り羽をのばせ」という妻の意見を聞いたりもします。ある男性が「こんなことを言っていました。「今晚はお父さんがいないからあり合わせにしよう」と妻が話しているのが聞こえて複雑な気持ちになった。僕が負担をかけている元凶みたいで。カップラーメンでい

いの」と。うーん、元凶だとは思わなければ、作る人と食べる人の気持ちのギャップ、どう埋めたいのでしょうか。皆さんどう思いますか。

家族を超えて

今、献立は家族を超えて地域の子どもたちのためにも考えられています。いわゆる「子ども食堂」と呼ばれている活動です。離婚や貧困など様々な理由で親が働きに出ていない間、一人で食事をする子どもたちがいることを知った大人が無料か安価で食事を提供しているのです。参加している子どもは「家だとテレビを見ながら一人で食事をしているけど、ここに来るとみんなでワイワイ言いながら食べるのが楽しい」と言っています。子どもだけではなく、ボランティアをしている大人同士の交流の場にもなっています。みんなが食べる、たったそれだけのことですが、そのことが子どもたちを元気づけているのです。

心と身体を支える

ある法話で「仏法は食べ物です。よく噛んで味わえば、血や肉となり私たちを支えてくれます」と聞いたことがあります。食べ物と同じように仏法は生きる上での基本だということです。「〇〇しなければならぬ」という思いに縛られている私たちに「それって本当ですか」と仏様はいつも問いかけています。食べてもお腹が空くように、仏法を聞いても忘れてしまう私たち。だからこそ、一生聞き続けていきたいものです。

次回は酒井義一さんの「私を照らすひかりの言葉⑱」です。

「回壇案内」

- 7月
 - 1日(土) 頓乗寺[萩原町] 西方寺[清見町]
 - 2日(日) 光雲寺[萩原町] 玄興寺[岡本町]
 - 8日(土) 永養寺[萩原町]
 - 9日(日) 速入寺[石浦町]
 - 13日(木) 願生寺[岡本町] 淨福寺[小坂町]
 - 15日(土) 妙覺寺[萩原町]
 - 16日(日) 慈雲寺[萩原町] 往還寺[一之宮町]
 - 17日(月) 久々野教会 [久々野町] 賢誓寺[萩原町]
 - 19日(水) 桂林寺[馬瀬]
 - 21日(金) 桂林教会[森]
 - 23日(日) 西教寺[朝日町] 大徳寺[高根町] 蓮光寺[馬瀬]

「坊文化講座(第1回)」

日時 7月6日(木) 午後1時30分～午後3時

講師 三本 昌之氏

講題 『「飛騨御坊照蓮寺縁起絵詞」お絵解き』

会場 高山別院 庫裡ホール

会費 1回 600円 3回通し 会員1000円 一般1500円

受付終了のお知らせ

7月25日(火)～26日(水)開催の「児童夏つどい」及び8月8日(火)～10日(木)開催の「真宗本願寺子ども奉仕団」は、参加申込人数が定員に達しましたので受付を終了しました。

公開学習会(第三回)

日時 6月21日(水) 午後7時半～

会場 高山別院御坊会館

講師 海法龍氏 (東京教区長願寺)

内容 歎異抄第十二章 聞法するという

テーマ こと

聴講料 500円

主催 高山二組若声会



復興を願う松の木

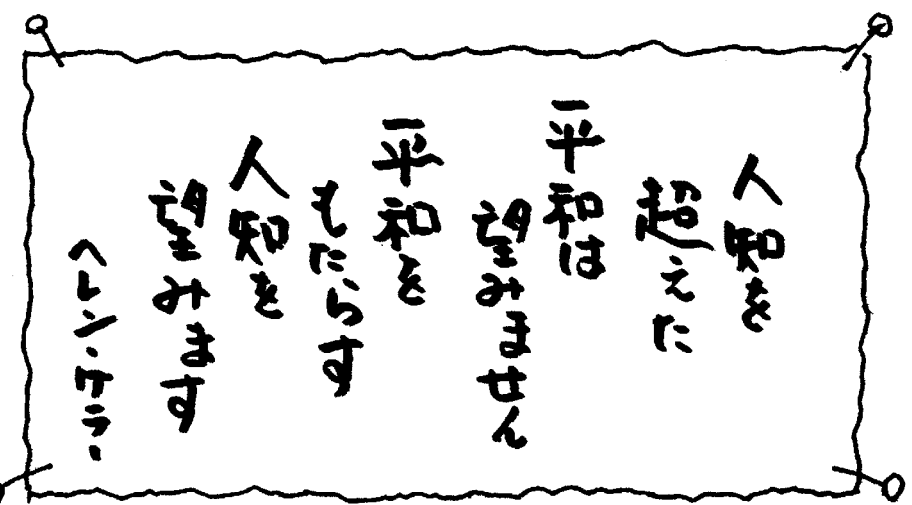
さる5月27日、岩手県陸前高田市で開かれた防潮林を整備するための「高田松原再生記念植樹会」に参加し、松の苗木を植樹してきました。

2011年、高田松原は東日本大震災で甚大な津波被害を受け壊滅。唯一生き残った松は「奇跡の一本松」と呼ばれました。震災後、飛騨仏教青年会は縁あってこの津波で流された松の木を譲り受け「松のしおり」を製作しました。震災を心に刻み忘れないために、この松が「こころのしおり」となることを願って。一昨年、しおりの売上金を義援金として、陸前高田市と高田松原を守る会にお届けしたことが縁で、今回の記念植樹会にお声がけをいただいたのです。松のしおりを通してお気持ちを寄せてくださった方々を代表し、復興を願いながら植樹させていただきました。この日は地元市民や全国の支援者が集い、1,250本を植えました。平成31年までには約4万本を植える計画だそうです。

高田松原の再生には50年かかると聞いています。復興はまだまだ道のりが長いですが、思いを寄せながら支援を続けていきたいと思っています。



飛騨仏教青年会



ひだご坊掲示板

定例法座・法話(午後1時から) ○6月21日(水)：岩崎正親氏「正覺寺」 ○6月27日(火)：三島多聞氏「真蓮寺」 ○6月28日(水)：藤守博氏「一念寺」 ○7月1日(土)：長谷教信氏「蓮光寺」 ○7月11日(火)：出雲路善公輪番 ○7月13日(木)：高島外成氏「常德寺」